

聚落の生態に就て

西 龜 正 夫

序 言

聚落の生態とは、その發生、成長、衰滅、並にその活動の間歇、急變等を指すのである。聚落は一つの生物と見ることが出来る。その生態を研究することは、その位置や形態や職能や分布や組織や名稱を研究すると同様に極めて重要なことである。即ち聚落生態學は聚落學中の一大重要部門たるを失はないのである。

こゝに聚落の生態に就て私の管見を述べようと思ふ。併し元來人文地理學の諸部門は今日尙まだ建設の途上にあると云つてよい。殊に聚落學の如きは頗る渾沌たるものである。この時にあたつて淺學なる私共が組織立つた系統を論ずることは嗚呼の沙汰である。たゞ諸賢の研究に對して多少でもヒントを與へることが出来れば望外の幸である。

聚 落 の 發 生

聚落とは人間住居の集合であると、私は定義する。その聚落が如何にして發生するかを考へて見る時、少くとも四つの場合がある。第一は人間の共同生活本能、第二は外敵防禦、第三は資源の發見、第四は企業である。

人間は共同生活の本能を有する。孤獨の生活を好まない。必ずしも生活上にどう云ふ利便があるとか云ふことは無くとも、一人よりは二人、五人よりは十人と相集つて生活を營む。かくして最も原始的な聚落は發生するのである。石器時代の住民にはこの種の聚落が多かつた様である。今日の村落にも亦この種の起因を有するものが少くならう。

外敵防禦が聚落形成の一因となることがある。石器時代にあつたといふ湖上聚落や、今日南洋の方などで見られる水上聚落の如き、明かに敵の防禦を目的としたものが多い。朝鮮の田舎を歩いて見ると、廣い平野には聚落が少くて山の麓や谷の口、殊に一寸人の氣付かぬ様な山陰に小聚落が多い。これは盜賊の横行した時代にその害を免れる必要から起つたものである。支那や歐洲に多い城廓市も亦その一種である。

資源の發見は聚落の發生を促がす。農業の適する平野があれば農村が出来るし、水産物の多い海

に面して漁村が發達する。殊に最も著しいものは鑛業聚落である。一度有用鑛物の發見があると、隨交分通の不便なところでも、或は氣候のよくない所でも急激に聚落が發達する。

鑛業聚落は發生の當初に於ては家族を持たない坑夫のみの集合から成る。これを陣地的の聚落と名づける。鑛業は概して冒險的の事業であるから、そこには無産者が多く集まり、一攫千金を夢みる者のみ多く、家族を伴ふて永住しようといふ者が少い。その上氣候がわるく交通が不便であると物資が欠乏して物價が非常に高く、隨つて又賃金も高いので人は益々贅澤な氣分になり、僥倖生活を營む様になる。これが陣地的聚落の特色である。同じ鑛物の中でも金・銀・石油などは不意に資源の欠乏することがあるので最もこの特色が著しいが、銅・鐵・石炭等は割合に永久的であるから隨つてその聚落も次第に發達して恒久的のものになる。

企業とは人間の意志によつて新たに事業の起された場合を云ふ。これは見方によつては資源の發見と同様に考へられるけれども、又著しく異なつた特色もある。企業とは廣い意味で、獨り工業都市や商業都市のみならず、政廳・學校・兵營・神社・佛閣の所在地、避暑避寒地・保養地・遊覽地別莊地・田園都市等をも包含するのである。これ等は交通の便利な氣候と風景のよい土地等に發達することが多い。工業的企業に就て見ると原料の所在地か動力の所在地か又は市場に近い處に起り易いが近時重要な動力源となつてゐる石油の産地には多く工業市が起らない。これは石油はその産

額に急變があり、概してその生命が短かいと云ふこと、石油は諸種の動力中最も運搬し易いこと、石油の産地は水が汚濁して住居として不適當であること等が主な原因である。

わが國の田舎にある小商業都市には定期市場から發達したものが多く、三日市、十日市などの地名さへ残つて居るものが澤山ある。これ等は最初交通の便利な處に市場をつくつたといふことが起原で、資源の發見と見てもよいが私は企業の中に含ませて見たのである。

聚 落 の 成 長

聚落の成長には膨脹と兼併と合同との三種の様式がある。膨脹とはその聚落自身の人口の増加によつて大きくなるもので、それには人口の自然増加と外部からの集中との二つの要素が含まれる。自然増加とは勿論出生死亡の差増を云ふので、これは都市よりも却つて田舎に於て著しいが、この種の人口増加は聚落そのものの膨脹とは精密に一致しない。即ち多少人口が増加しても戸數が増加し家屋が増加しなければ、聚落自身の膨脹とは見られないからである。人口の集中は村落から都會に向つての移動が殊に著しい。そしてこの種の人口増加は直ちに聚落の大きさに影響する場合が多い。

『都市は森林の如く成長す』とは名言である。一の森林が次第に膨脹發達して行く過程を見ると、

種子が散つて少し隔つた處に小さい森が出来、それが次第に生長しては合一して行く。都市の膨脹もこれと同様であることは都市の周邊の模様を観察すればよくわかる。必ずしも大きな都市でなくても村落に於ても同様である。街村などの發達を見ても片はしから順次に延びて行くものではなくて、飛び飛びに家が出来て次第にその間の空間があとから填められて行く。即ち街村は鎮村から發達するものである。

次に兼併とは接續町村の合併されて行く状態を指し、合同とは二個以上の聚落が合一する場合を云ふのである。兼併と合一との區別は合併される各聚落の大きさの比較から來るので、名古屋と熱田、神戸と須磨の如きは兼併の一例、神戸と兵庫、福岡と博多の如きは合一と云つた方がよからう。合一したのものにはその名稱に二聚落の名のそのまま残つたものがある。宇治山田やブダベストの如きはそれである。尤も宇治山田の如きは聚落學上から見れば單一な一聚落とは見られぬ點もある。合一は元來別々に發達した二つ以上の聚落の合併である。兼併も亦大きいと小さいとの別こそあれ別の聚落として元來獨立して居たものが、遂に合併されて行くのを指すので、この點が膨脹と異なるのである。即ち膨脹にあつては大聚落から派生した小聚落が出来て、それが順次合併して行くのであるから、元來の獨立聚落の併合とは趣を異にする。例へば廣島市に就て云へば巴斐や三篠は元來廣島市とはあまり關係の無い別の聚落であつたものが、廣島市の發展のために遂に合一して仕

舞つたのである。けれども南竹屋や千田町は、廣島市の住宅地若くは學校町として發達したものであるし、距離は遠くても宇品の如きも、廣島市の膨脹のために出來た聚落であつて、廣島市を離れてはその存在を許さない立場にある。東京市に就て見ても王子や千住と澁谷や板橋とは大に趣を異にする。

併し合併とか合一とか云ふ言葉の内容には、行政上の區劃を意味する場合と單なる聚落學上の言葉たる場合との區別あることを注意しなければならぬ。行政上の都市の區域と云ふものは、聚落そのものゝ大きさは一致しないものであつて、或時は前者が後者よりも廣く、或時はこれに反する。これは聚落の成長は生物の成長と同じ様に絶えず大きくなつて行くけれども、行政上の區域擴張は何年か何十年かに一度しか出來ないからである。例へば呼續や廣路は行政上名古屋市に屬しても聚落學上から見れば別個の聚落で、品川や龜戸は行政上は東京市外でも聚落學上から云へば東京の一部たること勿論である。

成長の方向に就て考へて見ると、大體地形と交通系統とに支配される様である。例へば神戸が東西に延びるのも横濱が複雑な枝を出してゐるのも主として地勢の制限を受けたものであつて、平地に向つて發達の余地が無ければ山腹に向つて這ひ上る。又東京市の發達方向を見ると主要なる各街道に沿ふて延びつゝあつて、その中で最も交通の頻繁な品川方面が最も長く延びてゐるのを見る。

臺地は住宅地として適當であるため低地よりも發達の速いといふことは最近の東京市に於て明瞭である。併し工業區、商業區としては低地の方に主に延びる。又限りなく延びて行つては都市の中心に遠ざかる不利益があるので、神戸などでも一面山腹にも延びて行く。河は膨脹を妨げるが、膨脹力が強くなると河を渡つて向側に延びる。大阪市の淀川に於ける、岐阜市の長良川に於ける如きはその一例である。徳島市などももつと發展したら川向ふの古川や宮島浦をも兼併する時機が來るだらう。海が膨脹を妨げる場合には埋立を行ふか、然らざれば廣東やバンコクの様子に舟上住居となつて水上に延びる。横に延びる余地が無くなれば空中に延びることニューヨークが何時も例にひかれる。

聚 落 の 衰 滅

聚落の衰滅には三つの原因がある。第一は資源の欠乏である。魚類が居なくなれば漁村が寂れるのは勿論で、殊に著しいものは鑛業都市である。就中金・銀・石油などは不意に資源の欠乏することが多いので、そのために急激に衰滅することが多い。第二は地變である。十津川が山崩れのため湖水を生じ、十津川村を埋めたために全村擧つて北海道に移住し、新十津川村をつくつたのは有名な話で、ゾイデルゼーの決潰のためには多くの聚落が海底に没し、櫻島の噴火では横山村が熔岩の

下に埋もれたり、その他暴風、洪水、津波等種々の地變で衰滅した聚落の例は少くない。中央アジアその他の古代都市の滅亡の如きも一部は氣候の變化に起因するものと認められて居る。

第三に擧ぐべきは人爲的原因である。奈良や京都が遷都のために衰へたことは云ふ迄もない。近時は軍港や師團の廢止で寂れた町が澤山ある。又郡役所の廢止に反對運動の盛なのは、その所在地の町が寂れるからと云ふのが裏面の理由である。不景氣が來れば工場が閉鎖されて多くの町が衰微することは近年北九州で澤山實例を示された。一體に企業によつて發生した聚落で二次的職能の發達して居ないものにあつては、この人爲的衰滅が頗る著しいのである。

間歇及び急變

聚落の活動が一定時を隔て、間歇するもの、或は聚落が一定の時期に發生、消滅を繰り返すもの、これ等を周期的の聚落と名づけ、聚落の活躍又は生滅が一回限り極めて短期間に起るものを一時的聚落と名づける。

週期的聚落には更に多くの種類がある。例へば草原地方の遊牧民の聚落の様は夏と冬とで山腹と山麓と交互に出来るもの、朝鮮・ロシア・アフリカその他各地に多い定期市場、夏又は冬のみ榮える避暑避暑地の聚落、登山の根據地、海水浴場やスキー場の如き、或は神社寺院等を中心とする聚

落の様に毎年何回かの祭禮の時のみ活動するものもあり、花時や紅葉時にのみ榮える遊覽都市などそれから樺太などの海岸には漁期のみ聚落があるし、熊野川の沿岸には減水期に河積の上に出來て増水期には撤廢される聚落がある。これ等は種々の立場から色々に分類され得るであらう。

聚落の急變に就ては本誌海岸號に『一時的港市に就て』と題して一例を説明したことがあるから茲には省略することとする。

アルプスの聚落

田中阿歌鷹

私は青年時代にスウキスに在て、山野を跋渉し、大に其山地の感化を受け、又大に之等の地方に親しみを持つ様になつた。其後スウキス山地の聚落や住民の生活状態、殊に移牧生活等の事に就ては、趣味を持つて、種々な書物の出版される毎に、之れを取急ぎ繙いたものである。之等の關係から數年前再び此國に遊ぶ機を得たので、各所を見學したが、内にもローヌ Rhone 河谷と、其支谷の或るものに就て、稍々細かに觀察することを得たのである。それで次に少しくヴァレー Valais アルプス地方の聚落と、其住民の生活状態の一端を紹介して見やうとするものである。